25. キレハシケチシダ（新称）はシケチシダとホソバシケチシダの雑種と推定される種類で，葉の切れ込みや胞子のう群の形は両種のほぼ中間であり，シケチシダからは葉の切れ込みが深く，小羽片は深裂し，葉裏は多少帯白色になり，胞子のう群が短いことなどで，ホソバシケチシダからは葉が大きいにもかかわらず切れ込みが浅く，小羽片が波状になり，胞子のう群が長いことなどで区別できる。ヤクシケチシダにも似ているが，小羽片は多少なりとも鎌曲し，表面が波状になり，先端はより尖っている。屋久島辻峠の白谷側に，両母種と混生してかなりの個体数が見られる。

□第2回国際生物系統進化学会議について　第2回国際生物系統進化学会議はカナダ，ブリティッシュ・コロンビア大学において1980年7月17日より24日までの8日間にわたり，世界29ヶ国より615名（公式登録者のみ）の生物学者が参加して開催された。会議においては一般講演に加えて12の大会シンポジウムと，17の特別シンポジウムが組まれて，狭義の生物系統進化学上の問題にとどまらず，広く生態学的な観点に立脚した研究発表と討論とが行なわれて，極めて盛会のうちに終了した。

大会シンポジウムは，(1)極地における refugia と極地生物相の進化，(2)北太平洋地域海洋生物相の起源と進化，(3)生物における繁殖戦略の進化，(4)進化学的にみた遺伝子発現機構，(5)生物群集構造の進化，(6)緑藻と陸上植物の起源，(7)真核細胞の進化における巨大分子機構，(8)アロザイムと進化，(9)遺伝物質 DNA の比較研究，(10) colonizing species の進化，(11)遺伝子給源（gene pool）の維持機構，(12)環太平洋地域における古生物学，の12トピックスにわたり，分子レベルにおける遺伝子発現機構の進化，遺伝子による発生機構の制御と進化から，陸上植物の進化や極地生物相の進化，さらには生物群集の進化にまでおよぶ極めて幅広いテーマが選ばれている。

特別シンポジウムでは，最近特に研究者の関心を集めている個別的な問題がとりあげられて，つっ込んだ論議が交された。植物に関するものは次のようなものである。(1)植物の交配システムと群集レベルにおける受粉機構の生物学．(2)系統分類学における多変量解析とその応用，(3)アカバナ科の進化と系統分類学，(4)種子植物の微細構造と系統分類学，(5)蘚苔類における形態的特徴とその生態的意義，(6)植物地理学における数量分類学の応用，(7)倍数体における酵素遺伝子座の進化，(8)性型の進化，(9)ウコギ科に関する知見の最近の進歩とセリ科との類縁関係，(10)大陸における生物相の生物地理学と進化，(11)系統学における巨大分子構造の利用と進化生物学，(12)系統生物学における長期的展望。

以上のように分科会に近い型でもたれた特別シンポジウムにおいても進化生物学における最近のトピックスと新しい方法に関する問題が論議された。特に大会参加者の関心を引いたトピックスは，種の生活史と適応戦略の進化，相互適応の機構，遺伝子発現機構と epigenetics などがあり，今後の研究の方向を示唆している。なお，次の第3回会議は4年後（1984年）に英国内において開催されることが承認された。　（河野昭一）